



入寮の儀式(左が筆者、中がAdam)

の手伝いをしたが、ガードマンに見つからないようにするスリリングさと明朝の反応を期待した。学校を変革したいという希望に満ちた日々であった。奨学生の割合が少なく、裕福なExpat(国外在住者)の子弟が多いシンガポール校では、しかしそのラディカルな主張は受け入れられず全員選挙で落選したが、当時パレスチナ問題に関して恥ずかしいほど無知だった私は、そのようなことに日常的に関心を持ち、そこから行動を起こす彼らに対して友達ながらも感心せざるを得なかった。

世界中に広がった友達

Sumiは最近まで世界でも最大のNGO、Oxfamで働き、多国籍企業の途上国におけ

る労働者の雇用状況の向上活動に従事していたが、彼女の夫がなんとUWCシンガポール校で歴史を教えることになったため、シンガポールに住むようになり「敵側に回ったな」と冗談を言ったりしている。SoeHuiは三大投資銀行の役員となり金融危機の影響で大変な日々を送っているが、昔からお金があったら賄賂を受けないパキスタンの首相になると豪語していたので、そのための行動に移る日も近いのではないかと期待している。

Adamは米国で生物学の研究を長い間していたが、最近英国のオクスフォード大学に移籍した。二〇〇〇年はUWC卒業一〇周年にあたったが、私がちょうどその時、英国ケンブリッジ大学内で結婚式を挙げたため、その場が一〇周年の同窓会となり、皆相変わらず夢と一定のアクティビズムに満ちた大人になっているのを見て、妙に安堵したのを覚えている。

Seng Weeの実家はシンガポールとの国境に近い町にあり、何度か招待された。一度親戚が大勢集まるチャイニーズ・ニュー・イヤーの際に呼ばれ、彼の祖母に会ったことがある。マレーシアは第二次世界大戦中、日本の侵攻を受け多くの犠牲を払っている。日本は戦後誠意を持ってその補償や謝罪をしたと言えない部分が大きく、侵攻を受けた国では現在もしこりを残していることが多い。Seng

Weeの祖母も日本の侵攻時にひどい経験をし、日本のことが大嫌いであると言われた。アジアにいるとこのようなことを多く経験し、日本という国の国際的な立ち居振る舞いの不十分さを実感する。幸いSeng Weeの祖母はこれを私に対する個人的な感情として持つことなく、「日本は嫌いだけど、あなたは好きよ」と言われた時はなんとも言えず嬉しかった。

UWCの経験が希望を 実現させた

こんなUWC時代を過ごし、私は国際的な職場で世界の発展と友好のために働き、日本がより外交的に強化されることを願い国際機関での就職を目指すようになった。UWCにいたときのようなアクティビズムとまではいなくとも、積極的な形で国際貢献したいという希望といろんな国の人の中で国際人として生きたいという願いがUWCで醸成された。個別の国籍に囚われることなく、世界の中の一人として働くことができる国際機関は、問題点も多くありながら素晴らしい職場であると断言できる。これまでさまざまな職を経験し、国際機関への道が遠のいたなと思った時期もあった。しかし、このような希望と信念を持ち目指し続けられたのはUWCでの得難い経験によるものである。

国際機関への道

OECD金融・企業局
シニア・ポリシー・アナリスト

横井眞美子
よこい まみこ

一九八八―九〇年UWCシンガポール校へ留学。九四年筑波大学国際関係学類、九八年筑波大学企業法学士課程修了、二〇〇一年ロンドン大学博士課程修了。日本銀行、ロンドン大学クイーン・メアリー・カレッジ国際金融法教授、金融庁研究官を経て、現職。パリ在住。

国際機関という職場はイメージが湧きにくい。新聞やメディアでその名前を見聞きしたり、読んだりすることはあっても、具体的にどのようなことを行っているかを知ることが意外にない。しかし、UWCの日々は私の関心を国際機関に向けさせ、紆余曲折を経ても実現させる決心を持たせた。

私は現在、経済協力開発機構(OECD)の金融・企業局でシニア・ポリシー・アナリストとして働いている。職務の中心は金融・保険市場に関する調査・研究であり、加盟国が参加する委員会のためにレポートや研究成果を準備している。特に、今は加盟申請をしている五カ国に対する審査をしており、そのため申請国の金融・保険市場がOECDのさまざまな条約、合意に即しているかを調査している。

UWCの親友はアクティビスト



私は一九八八年にUWCシンガポール校に奨学生として派遣された。シンガポール校での留学生活は自分のアジア人としてのルーツを認識し、その後の社会人生活にも大きな影響を及ぼした。当時まだ発展途上国であった東南アジアを旅行し、アジアの歴史を生で勉強する機会に恵まれた。また文化習慣の違い、さまざまな国の人々の考えに触れ、友達・同級生の行動力と勇氣に感銘と啓発を受けた。日本では先生に面と向かって歯向かうことは考えられないが、友達とはたとえ校長の決定したことであったも果敢に議論を挑んだ。

UWC時代は高校生という多感な時期にさまざまな人の考えに触れることができ、人生の中でも最も充実感があつた気がする。最近

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四二四名の卒業生を輩出している。

はFacebook^(注)の普及でUWC時代の友達と久しぶりに密なコミュニケーションを持つ機会が増え、その人脈の広さに改めて感銘し、そんな友人を持ったことを誇りに感じる人が多い。私のUWCでの親友は華僑とインド人の間に生まれたマレーシア人のSumi、リビア生まれのパキスタン人Soofan、オーストラリア人と華僑の間に生まれたAdam、そして中華系マレーシア人のSeng Weeである。

前者三人は当時より非常にアクティビストな人たちで、私はいつも彼らの行動に驚嘆と尊敬を感じていた。私は当時あまりにも自分に自信がなかったため立候補しなかったが、三人は生徒委員会の役職にそれぞれ立候補した。その中で、当時パレスチナ独立の中心的なグループであったPalestine Liberation Organization (PLO)をもじって、Student Liberation Organization (SLO)としようものなを結成し、ラディカルなことをしたいという欲望から真夜中に学校に侵入し、すべてのトイレに選挙用のビラを貼りまくった。私もそ

(注) Facebook: アメリカの大学生向けに作られたソーシャル・ネットワークキング・サービス(SNS)。現在は一般にも開放されている